
おっさんが逝くIS物語

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっさんが逝くIS物語

【Nコード】

N3816X

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

大神蛮。ニートで駄目人間で童貞である。そんな彼は、ある日ナ
ンパされたビッチを殴ったはいいがその彼氏である御曹司イケメンによって
殺されてしまった。そんな彼を転生させるといった神が現れた。そ
して、転生先は・・・インフィニット・ストラトスだった。

タイトル受けがちよっと危ないと思ったので変更しました。

ブローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う(前書き)

知っている方はどうも。初めての方はこんにちわ。

思っがままに書いた。後悔はしていない。

ブローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う

はて？ここはどこだろうか・・・。

ふと俺は思った。

こういう時は慌てず、落ち着いて行動するものだ。俺ってカッコイイ！！

さて、確かに昨日唯に“無・理・や・り”街に連れて行かれたんだ。あ、唯って俺の幼馴染。まあ、美少女の足元に及ばない女だがな。話を戻す。一人で歩いてたら迷子になり、いきなり変な女にナンパされた。

「俺は童貞だ。テメエみたいなビッチに俺の純血は渡さねえ」

って言ったら切れて、ウザいから殴った。

そしたら、次のビッチの男が来てなんか話して帰らせたら次の日・

「あ、俺殺されたんだ」

俺は答えに辿りついてしまったようだ。
って！！

「チクシヨメー！！結局は金か？権力なのか？くたばれイ・ケ・メ・ン！！爆発しろー！！」

「おい」

なんだか声ができる。でも、男だから聞こえない振り。

「おい！！聞いているのか？」

「ワタシノミミ、美少女ニしか反応シナイ」

「反応してるじゃろつが」

「粉バナナだ！！！！」

「日本語おk？」

すると俺の目の前には・・・胸糞悪く、加齢臭のする爺がいた。

「誰が胸糞悪く、加齢臭のする爺だ！！」

「サイコパス?!」

「黙れ！」

「(しゃ、喋れない)」

「当然。僕は神だから」

「髪？」

あ、喋れた。

「ゴッドじゃ」

「俺は幼女神しか信じない」

「まあいい。実はお前さん死んだから転生させることにしたんじゃ」

「却下だ。転生より蘇生させろ」

「却下」

「んだよ！！神なら蘇生ぐらいさせるよ！俺はまだ童貞卒業してねーんだよ！！女抱きてーんだよ！！俺の聖剣まだ未使用なんだよ！！」

「黙れ、童貞」

「童貞舐めんなー！！」

くしばらくウザい言い争いがあるので綺麗な空を眺めてお待ちください〜

「で、転生っていうけどなに？テンプレ乙的な原作ブレイク的なアレですか？」

「そうじゃ」

「いやだ。天国逝きたい。天使とイチャイチャしたい。界王様から界王拳ならっ」

「黙れ、邪気眼。ちなみにテメーにやる天使はいねえ」

「……くそ、死んでも童貞には居場所がないのかよ」

「だから、転生させてやると言っているだろっ」

「やだよ、めんどくさい。また人生一からやり直すのなんかダリイもん」

「わかった、わかった。だから、キンクリみたくしてやるから」

「それなら許可する」

「はー（メンドクサイ童貞じゃのっ）」

神はあまりにもウザい童貞に会話すら苦痛を感じるようになった。

「転生場所は？」

「インフィニット・ストラトス
IS」

「なにそれ？」

「ん〜、女が世界を支配してる？」

「ようわからん」

「まあ行けばわかる」

まあ、そつちのが面白いしろう。
ほっほっほ。

「というわけで転生するに当たって、お前さんに特典。まあ、願いをいくつか聞いてやるう」

「別にいらねえ」

「ひよ！なんで？！身体能力MAXとか俺TUEEEEとかしたくないのか？！」

「別にニートに能力はいらぬ。マウスをクリックできるだけの力

があればいい。それに俺童貞歴30歳だから魔法使えるし」

「……………」

ほ、本当じゃ。地味に魔力というかMPがある……。

「そ、それでも神としての立場が……」

「じゃあ、アレでいいや。人をくれ」

「人？」

「ああ、なんていうか技術的な人間が欲しいんだよ。そうだなー、デモンベインのウエストでいいや」

「（また、濃くて地味なキャラを選んだのう）わかった。それにしよう」

「あんがと」

「それとなにか願いが思いついたら念じればまたここに来るようにしておくからのう」

「誰が爺と会いたがる……か—————!!!」

するといきなり俺の足元に穴が開き、俺はそこに落ちた。

そして、それは次第にしまってまた白い空間に戻り、神はその場か

ら消えた。

後日

「はー、厄介な奴だったのう」

高級な椅子に座りこの間の童貞のことを思い出していた神。最近、部下からあの童貞についての資料ができたのでさっそくみてみた。

「……うそーん」

そこには確かにニートで駄目人間で童貞とあつたが、幼馴染の超美少女から好意を寄せられているがまるつきし気付いていない最低の男。

「って、マジで美少女ー!!」

その子の写真をみてあら不思議。まるで女神のような女性だった。しかも、あの童貞の同い年で未婚。しかも……だったとは。

「本当、蘇生してやればよかったかのう……」

これでは、彼女がかわいそうじゃ。うん、彼女が。
それから、目で順に追っていた。するとあるものが目に付いた。

そこには……

あの【大神一郎】の末裔である。と書かれていた。

つまり……

【大神蛮】は、実はモテる（特殊なイベントをクリアしたのみ）

「本当、駄目人間じゃなければいい人生を送れたものを……」

そう思った儂は彼の“頼み”にちよつとだけサービスすることにしたのだった。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う（後書き）

というわけで、始めてしまったよ。

しかし、こんな作品でも読んで感想くれたらうれしい。

実際はもう一つの方の息抜きでやっているんだが……。

さて、あと一話と設定を出すのでよろしく

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った（前書き）

きつとこれから迷言の嵐を連発してくれるはず。

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った

おつす、オラ大神蛮！30歳で魔法使いの童貞だ。見知らぬ世界に来て、オラなんだかワクワクして。

「こねえよ、馬鹿」

改めて、大神蛮だ。さて、転生したのでちょっと現状報告だ。気付いたらいつもの俺だった。よくわからんが、一応俺は別の人生を過ごしていたらしい。でも、記憶をみる限りでは死ぬ前と全然変わってなかったぜ！

ただ、幼馴染の【葛城唯】だけはいなかった。べ、別に寂しかったわけじゃないからな！あいつがいなくて清々してるところだ！

ここで、俺の頼んだことを教えよう。ドクターウエストみたいな技術屋がほしいという頼みだ。なんで、これにしたかというところ。そういやつがいればギャグ補正でなんでも造ってくれる気がするからだ。

しかし、ところどころい。

ここで、どんな間違い起きたかは知らんが……。ウエストだけじゃなくて霸道財閥まであった。

……。デモベフラグ？ロリ本は何処かな？

おっほん！

で、関係はというと。霸道構造が大神家と仲良かった。俺も顔見知り。瑠璃から兄的な存在へ。みたいな感じだ。

ちなみにウエストにもあったよ。やっぱり、あいつは俺が認める漢だけはあったぜ。

で、この世界。ISだっけ？

記憶で知ったが……。女が使ったって宝の持ち腐れだぜ！男が使ったってその浪漫があると俺は思うね。

そして、現在はというと……。

「蛮、起きなさい！もう、お昼なんですよ！」

霸道財閥の総帥に起こされていた。

「んだよ、瑠璃。まだ、お昼だろ？いい子は寝る時間だ」

「いい子は起きている時間です！」

「30の俺にいい子なんて言われてもな〜」

「もう、しりません！」

ボタン！

扉を閉めて出て行った。

あんなこと言っただって、また明日起こしに来てくるんだ。可愛い奴め。

あ？お前、紳士だらだった？

ばーる。アレは妹的な存在だからいいんだよ。

にしても、お兄様と呼んでいたあの時代が懐かしい。俺、育て方間違ったかな？

まあいいか。さて、寝よ。

瑠璃 side

霸道瑠璃。世界にその名を轟かせる霸道財閥の総帥である。

そんな彼女、瑠璃は彼を起こしたあと自分のオフィスで溜息をついていた。

「はあ。まったく、蛮には困ったものです」

いつも、いつもああ言っただろう言う人間。ニートで駄目人間で童・

・・・こほん。なんですから。
いつも、心配している私の身にもなってほしいです。それに・・・
異性しても見てほしいのに・・・。

「お嬢様、また壘様は駄々をこねているのですか？」

執事のウインフィールドは紅茶を入れながら私に聞いてきました。

「駄々と言うよりは・・・子供です。はあ、昔はあんなにカツコイ
イ・・・くなかったですわね」

「ふ、そうですね。しかし、あれでも壘様は大旦那様からは『あい
つはやればできる子だ』というも仰ってましたからね」

「お爺様の言葉を疑うわけではありませんが、やる時期が一年に一
回あればいい方なんですから」

「それでも、壘様のことは誇りに思っているんでしょう？」

「当然です。私の、自慢のお兄様ですから」

そう、お兄様は私の、世界で最高のお兄様なんですから。

End

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った（後書き）

実は書いてて楽しい

主人公設定

主人公 大神 蛮

モデル ガンソードのヴァンをちょっとイケメンにした感じ？

容姿 ブサイクではなく、喋らなければそれなりの顔だったりする。
本人はブサイクだと思っている。

服装 普段着は何故かタキシードに似た物を着用し不思議な帽子をかぶっている（ガンソードのヴァンのアレ）

年齢 30歳 転生後18歳です（嘘）

能力 スカウター 邪気眼

大好きな者 美少女（蛮から見て） 小さい子（紳士だから見守るだけ）

嫌いな者 イケメン（一夏も含まれる） あとウザい女

職業 ニート 自宅警備員 邪気眼使い 魔法使い見習い

友人関係 転生前 唯（幼馴染） 魂友ソウルブラザーズ 転生後 ドクターウエス

ト エルザ 霸道瑠璃 ウインフィールド その他財閥の人

二つ名 死ぬ前までは『無職な男 蛮』 転生後『高校生な蛮』らしい

蛮から一言『俺は女だって殴れる』

唯から一言『蛮はやればできる子』

備考

どこにでもいる普通のニートで駄目人間で童貞だった。ある日、変な女（蛮曰くビッチ）に『童貞きもーい』と言われカツとなって顔をぶん殴った。そしたら、そのビッチがどっかの御曹司の男の女で殺され、会いたくもない糞爺に転生させられた。

生前は上記のように童貞で駄目人間。彼女いない歴年齢であり、イケメンが大嫌い。
しかし、そんな彼にも幼馴染の唯という子がおり。（ちなみに彼女はエリートコースまっしぐら）。鬱陶しく思っていた（唯に対してはツンデレ）。

また、30歳になったことで魔法が使える（ほんの些細な魔法）。他にも邪気眼で漫画を読めばある程度使えるというある意味でチート身体能力。

実はある血筋の人間で、たまに身体勝手に動くらしい？

作者曰く 『現実的な転生者を求めたらこんな感じかなと思った』
あと、つよきすのフカヒレが一番近い感じかもしれない。

幼馴染 葛城 唯

まさに美少女と言うべき存在であるが壺にとっては美少女の足元に及ばないらしい。

小さい頃から壺と一緒に、ニートになった彼を今でも気かけ外に出そうとしている。

ぶっちゃけ壺のことが好きだがまったく相手にされていないが彼女から見れば照れ隠しらしい。ちなみに である。

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど（前書き）

不定期といいながら投稿する俺

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど

すべてはこの一言から始まった。

「というわけで、蛭。あなたにはIS学園に行ってもらいます」

「なにがというわけで俺はあんなところにいかなくてはならないのか？」

ちなみに俺はISが使えるらしい。

回想。財閥の工場にいった「ISがあった」「あーこれがISなのかぼちつと「ん？なんか装着できたぞ。てな感じ。」

「それは、蛭。あなたを更正させるためです。このままではあなたは一生私が面倒をみななければいけません」

それはそれでいいのですが……。そ、それではお兄様のためになりませんかからね！

「えーヤダよお。瑠璃、俺を一生養ってくれるって言っただろっ？」

「じゃあ、結婚しましょう」

「妹で」

・・・ッ！お兄様はどうでもいい所で反応がいいんですから。

「それになあ、俺は30だぞ？高校生って柄じゃねえ」

「大丈夫ですよ、蛮様。ちょっと背が高くて、ちょっと老け顔な高校生で通りますから」

「さりげなくフォローすんな、ウインフィールド」

しかし、彼の言う通り蛮は背が高く老け顔なのでそれなりにみえなくはなかったりする。

「それに、蛮様」

「なんだ」

「もう先方と手続きを交してしまいましたので」

「・・・なにそれ。酷い。だから、権力って嫌い」

「それに、蛮以外の男性でISが使える人が発見されたらしいです

から時期的には丁度いいんです」

「誰それ？」

「この方です」

ウィンフィールドがリストを見せてくれた。そこには……イケメンらしき顔をした餓鬼がいた。

「俺の嫌いなタイプ」

イケメンは死ねばいいと思う。

「でしょうね」

「それに、IS学園は女性だけです。蛮様の好きな美少女がみつかるかもしれませんよ？」

「む」

それを聞いて私はちょっと嫉妬してしまいました。彼はお兄様を行かせようとそう言っているのでしょうか……やっぱりむかつかますわ。

「いるわけない。それに、餓鬼には興味ない」

「まあ、当然ですわよね」

「しかし、もう話は済ませてしまっていますし」

「俺はいないっいたらいいかない!」

まるで、おもちゃコーナーでおもちゃをねだるような子供だった。それを見て瑠璃は溜息をつき、最終手段に出た。

「では、蛮。ごうじましょう。もし、あなたがIS学園に三年在学しちゃんと卒業できたら」

「できたら?」

「一生養ってあげます」

「マジ?」

「真剣まじです」

「」「」「」「」

「ヤッフーーーーー!.....これで、俺も天の道みたいにロイヤルニートだぜ!.....」

配管工ジャンプをしながら叫びまくるおっさん。
やはり、自分の年齢などを自覚していないらしい。
だが、彼は肝心なことに気付いていなかった。

「（ふふ。これで、三年たてばお兄様は私のモ・ノ）」

瑠璃は策士だった。

対してウインフィールドは。

「（これで霸道財閥も安泰です）」

同じだった。

「イエーイ、空中一回転!!」

なぜか、跳んで一回くるっと回って見せた。二トの癖にハイスペ
ツクである。

こうして、蛮のES学園行きが決まったのである。
果たして、彼に一体どんな運命が待っているのか?!

次回まで、ご期待ください

「関係ないけど、フォーゼの名前の意味は40周年「4（ふおー）（ぜろ）（でフォーゼなんだぜ？これで、友達に自慢しよう！）」

「誰に言っているのですか、あなたは」

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど（後書き）

さて、次回からES学園に行くことになります。
しかし、おっさんが行くのって無理あるよねー

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんはなんていうかこれからいろいろと飛ばします。あと、主人公視点が多いと思われます。

それと、主人公はあるくクロスオーバー。いろんな人の名前やネタが出てきます。

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

童貞 side

拝啓

天国にいるお父様、お母様。あなた達のいい意味で期待を裏切った息子は今15年ぶりの高校生活を迎えようとしています。

まあ、これでも幼馴染の唯に無理やり同じ大学。確か・・・MIT（マサチューセツェットか大学）にも言ったような気がします。そこで、天才ちびっこ先生にも会いました。ベッキー、元気かな・・・。

それは、さておき。私は今IS学園、自分の教室である1-Aにいます。席は窓側の一番後ろ。まさに、絶好の場所。幼女神は常に俺と共にあるらしいです。

やはり、周りは女ばかり。しかし、美少女は居ません。

あ、でも副担任の真耶ちゃんは別ですよ？眼鏡っ子で可愛い。そして、けしからんお胸をお持ちです。

で、ただいま自己紹介を行っております。男は俺以外にむかつくイケメンしかいません。

イケメンが自己紹介をしているのですが。

「織斑一夏です・・・。よろしく、お願いします・・・。以上で

す！」

はい、君。企業の面接は絶対に受からないね。間違いなく。で、周りの女子も期待していたらしくかなり落ち込んでいる。テンション的に。

「まとも、自己紹介もできんのか貴様は」

現れたのはアレだ。確か・・・ブリーナク？だっけ。なんか有名な人。

俺は知らん。

ていうか、アレだね。ギャルゲーの気が強い委員長とか、お嬢様、お姫様系の生徒会長とかなタイプだろう。

けど、中身を崩せば落ちるぜ・・・へっへ・・・。ま、落とさんが。

「改めて、初めまして諸君。私がこのクラスの担任の織斑千冬姉だ。諸君を一年で使い物になる操縦者にするのが私の仕事だ。出来ないものには出来るまで指導をしてやる。逆らってもいいが私のいう事を聞け、いいな」

じゃあ、授業受けたくないでござる。

『ぎゃあああああああ！！』

『本物よーーーーー!!!!!!』

うるさい。周りの女子がうるさい。
で、色々あって・・・。

「次、大神。さっさと自己紹介しろ」

かちーん。おじさん、怒っちゃったよ？
年上に対する礼儀がなってないんじゃないかな？調子に乗るなよ、
アバズレ。

「・・・大神蛮・・・d、です。こんななりですが自分はちよつと身
長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳で
す・・・。あ、間違えた」

『ズコーーーーー』

なんか、大半が机に埋もれていた。ま、いつか。ばれたって俺に損
得ないし。

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ね
ばいいと思う」

最初が肝心ってよく言うけど、ここで群れをつくる気はない。ていうか、美少女がいない時点でもう帰りたい。

あ、真耶ちゃんは違うからね。

End

織斑一夏 side

俺の名は織斑一夏。偶然、ISが使える男になった男だ。本当、なんで動かせちまったんだ……。周りは女子だけだし、俺以外にも男がいるけどなんか……。おっさんがいる。

で、自己紹介しただけで千冬姉にはぶたれるしろくなことがない。そして、あのおっさんの番。

「……。大神蛮……。d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた」

って！やっぱり、おっさんなのか？もう、そっいつ年なのか？！

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ね

ばいと思っ」

は・・・？今、なんて言った？

と、とにかく。男同士、仲良くしたい。休憩時間に話しかけてみようと思った。

だが、まさかあんなことになるとはこの時俺は思っっていなかった。

End

全員の自己紹介が終わり、休憩時間となった。

蛮は机に伏せ寝ていた。そんな彼に同じ男である一夏が話をしようと近づいた。男二人が一緒になっているその光景をクラス中の女子が見ていた。

「あの・・・大神さん？」

一夏はおそらく年上だと思ったので一応敬語で尋ねた。

「・・・ああん？」

「いや、同じ男同士だから・・・話をしたいなあと・・・」

気付けばイケメンが俺の前に立っていた。そして、俺はある事をし
だした。

「（スカウターON!!）」

説明しよう。スカウターとはイケメンの数値を測るものである。基
準を0とし、上からいくとイケメンであり、マイナスになるブサイ
クという数値が現れる。そして、一夏は……。

「（5、10……25。ここら辺は普通だな）」

ちなみに、本当のイケメンは測らずとも見ただけで殺意が湧くらし
い。

「（30……40なに？まだ上がるだど……ふむ、55。ち
イケメンめ……こ、これは?!）」

すると驚きのデータが検出された。

「（は、ハーレムの可能性あり……だど？つまり、フラグ建築士と
いうわけか。決まったな）」

そう、すでにこの瞬間から互いの関係は決まってしまったのだ。ていうか、関わること自体がありえないのだろう。

「失せろ、イケメン。俺はお前が嫌いだ。だから、二度と俺に話しかけるな」

「は？・・・いや、な、なんで!？」

「その口を接着剤で止められて欲しくないならとっと失せろ」

そう言いつつも俺は席を立ちがあり教室を出た。
ふ、全国のブサイクが見たら俺を賞賛するだろう。よくやったと。

こうして、俺の学園生活が幕を開けたのであった。

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

次回の予定ではデモンベインが出てきそうです。

イケメンなんてふるぼっこ

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ(前書き)

同じところをまた書くのが面倒なのでかなり略しています。

正直、誰かの視点をするのが大変なんだよね。

まあ、とにかくデモンベインがでるよ!!

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ

唐突だが俺は馬鹿な餓鬼どもの喧嘩に巻き込まれた。

あの大佐殿に似たような声を持つお嬢様馬鹿があのでイケメンに何か見下したようなことを言ったら馬鹿が食いついて・・・。

で一週間後に試合をすることになって、ついでだから俺もやれと命令してきやがった。

俺を巻き込むな！！

そして、一週間などあつという間に流れ。現在、俺はアリーナでの戦闘を見ている。

イケメンVS大佐殿もどき。

イケメンのISは白式と言つらしく、なんか見てる限り刀しかない。浪漫あるなあと思っていたが相手のISがブルー・ティアーズとかいう遠距離のISでどうみても振りだった。

なんか、ファンネルが飛んでるけど俺が想像していたファンネルと全然違う。

アレだよ、こう・・・ぴゅん、ぴゅん！ぴゅんって飛んでないんだ

よね！

メンドクサイのでその後の展開。

堕ちなさい！＝うわぁ！ドーン・・・＝やりましたわ！＝やってない

みたいな感じ。なんか、イケメンの機体が変わったけどそんなに変わってなくてね？

もし、これがデジモンだったらあの曲が流れるからめっちゃテンションがあがるんだけどな・・・。

まあ、感知的に処刑BGMが流れないところをみると負けるな。イケメンは。ざまwwww。

そして、案の定イケメンは負けた。けっけ。

で、俺の番な訳だが。

「よし、大神。さっさとピットから出る」

「・・・へいへい」

「返事は、はいだ」

「ほーい」

「（ギョー）」

へへーんだ。睨んでも怖くねえよ。
まあ、ここはちょっと挑発でもしておくか。

「たく、年上に対する態度がなっていないんじゃないか？」

「そつだとしても、貴様私の“生徒”だ」

「ふん。俺が認めている教師は金八先生か尾木ママと地獄先生ぐら
いだ」

「……」

「ふ、知らんか。教師の癖に、あの偉大な先生たちを」

まあ、両者ともこの世界にはいないとは思うが。

「あまり調子に乗るなよ？……童貞が」

言ったな。お前は言うてはならんことを言った。
確かに俺は童貞だ。認めている。俺は童貞だと。それを男に言われ
たってなんとも思わない。イケメンは除く。だが、女に言われるの
だけは許してはならない。赦してはならない。

「この処女が……魔法使い舐めんなよ？」

パチン！

俺は指を鳴らした。

しかし、周りに変化はない。

「ふん、一体何を……………」

「どうしたんですかあ？（2828）」

だが、すぐに効果は表れていた。それは、千冬自身だ。そう、魔法は彼女自身に起きていたのだ。

説明しよう。大神壱はMPを消費することで本当にどうでもいい魔法が使えるのだ！

ちなみに、MPは30。まあ、年齢。意外と使ったら回復するのだが、回復の方法がこれまた意外でそういう系のモノをみれば回復する。感覚でわかるらしい。

「貴様……………」

ちなみに、壱がかけた魔法は……………ホックを外す魔法であった。

「さして、逝ってくるかな……………」

そして、俺は冷静に保っている女を置き去りにピットに向かった。

「じゃあ、いくかな……。アル」

『うむ、やっと出番か』

俺は腰のホルスターから本を取り出した。これが、俺の機体の待機形態である。しかも、なぜかAIつきで、そのAIがアル・アジフ。

別に俺、そこまで願っていないんだけどな……。

『ほれ、さっさと起動キーを言わんか』

「なあ、本当にいなきゃいけないのか？」

『何を言っている？お主だって、最初はノリノリでやっておったではないか』

「いや、アレは感動と言うか若気の至りというか……。若くないけど」

『とにかく言わんと起動しないからな』

「ケチ。……。はあ、わかった。だから、合わせろ」

『うぬ。それでいいのだ』

そして、俺は気をとりなして。

「憎悪の空より来りて」

『正しき怒りを胸に』

「我らは魔を断つ剣をとる」

汝、無垢なる刃 デモンベイン！！

纏うは鋼。だが、ただの鋼ではない。ヒビイロカネと呼ばれる特殊合金、それは鉛の弾丸ではビクともしない強固な鋼。

それを全身に纏い、その姿は鋼鉄の戦士。

だが、それはISと呼ぶには相応しくない。そう、これはISではない。機体を動かすのは『銀鍵守護神機関』『獅子の心臓（コル・レニオス）』と呼ばれるISのコアとは別のモノ。そして、何よりこの機体を動かすのに必要な気合と勇氣と根性である。

ちなみに、蛮にはどれも当てはまらないものだ。

だが、蛮が普通のISを動かしたのは確かである。

このデモンベインは霸道鋼造が立案し長年かけ、何故かウエストとかなによって完成した。

とにかく、なんかスゲー機体なのだ！！

「ふーん。まあ、こんなのが貴族とか笑わせるな」

「なんですって……」

蛮の言葉にセシリアは反応した。彼女は女尊男卑の影響が大きく、大きな態度をとっていたのだ。だから、彼の言葉にカチーンときたのだ。

「俺が知っている貴族は誇り高く、何より人を差別などしない」

そうあの誇り高き海賊の末裔？ 誇り高く、そして美しかったあの人。そう、昔は綺麗だった。けど、そんなことを言ったら俺は殺される。

45

「ふ、ふん。そんなの信用できませんわ」

「餓鬼にはわからんよ」

「なら、その誇り高い貴族を紹介してくださらない？」

「俺に勝ったら教えてやるよ」

「調子に乗って……。いいですわ。手加減などしてあげません。徹底的に叩きのめして差し上げますわ」

「まったく、大佐殿もどきがなにを」

『両者位置について』

アナウンサーが入り両者位置につく。ちになみに、デモンベインは飛べないので地上にいる。

『試合開始』

「さあ、落ちなさい！」

「俺はもう地上にいるけどな」

ブルー・ティアーズが装備しているスターライトを避ける。それから、軽々とステップを踏みながら敵の攻撃を避ける。

「ッ、ちょこまかと」

「あー、だりい」

セシリアは必死に狙ってはいるが蛮はそれを避ける。しかも、飽きてきていた。

『「こら、真面目にやらんか！」』

「だってよ、避けてるだけじゃつまらないんだもん」

『仕掛ければいいだろが』

「ん〜めんどくさいと言うか」

『まあ、お主が相手をするには弱いのは確かだな。うむ』

「餓鬼相手に向きになるのもなあ」

「何を一人でブツブツと！」

ちなみに、アルとの会話は蛮にしかできない。周りからは独り言を言っているようにしか見えない。

「それに・・・」

蛮はあることを思い出していた。

それは、このデモンベインは言わばゲームの最初と同じ状態なのだ。いや、第一章と言うべきか。武装はバルカンとアトランティス・ストライク、そしてレムリアインパクト。

特にレムリアインパクトは威力が高すぎるので使用が禁止。リミッター無でやるとES諸共パイロットが昇華されちまうのさ！！
だから、ニトクリスの鏡とかアトラック・ナチャもない。

「さらに言えば飛べないもんな」

『仕方あるまい。まだ、我とこやつは完全ではない』

そう飛べないのだ。跳べるが飛べない。なんていう矛盾。
まあ、原作でも後半しか飛んでないしな……。

『ん？なにやら向かってきたぞ？』

目をやるとそこにビットが来た。

俺思っただけどビットとかファンネルって言う人は年代が上で、ドラグーンて言う子はアレだと思っただよね。

「さあ、私のブルー・ティアーズで踊りなさい」

「悪いな。ダンスは美少女と踊るって決めてるんでな」

「私がそうでないと言いたいのかしら!？」

「青臭い餓鬼なんか興味ねえ」

「ッ！落ちなさい!！」

ブルー・ティアーズがデモンベインを狙う。
しかし、またもや簡単に避けられる。

「仕方ない、仕掛けるか」

『おお、お主が自分から動くとは』

アルは蛭が自分から動くことに驚いていた。まあ、動いたら負けと言っている男だから仕方がない。

「だって、終わらないんだもん」

『まあ、そうだな』

そして、遂に蛭が動く。

しかし、敵は空の上。蛭は意外な行動に移る。

「秘儀ビット跳び」

すると彼はビットを踏み台にして彼女に近づいた。

「な!!」

流石の彼女も驚いていた。

そして――

「アル！」

『断鎖術式番号ティマイオス、弐号クリティアス起動！』

デモンベインの強大な脚部？から出ている突起が起動する。

「行くぜ！アトランティス・・・」

最後のビットを踏み台にして高く跳びながら一回転。

『『ストライクーーーー！！！！』』

まるで、流星のように蹴りを突き出しながら落ちてくるデモンベイン。

セシリアは避けようとするが反応が遅ぎ、アトランティス・ストライクをもろに喰らい。

「きゃああああああああ！！！！」

ドーン！！！！

アリーナの壁にめり込んで激突した。
一方蛮は。

「決まったな」

『まあ、まずまずと言ったところだな』

まったく気にしていなかった。

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ（後書き）

実は、この世界というわ生前でもそうなんですがある作品とクロスしているのです。

まあ、今はでないけど。

さて、次回は一夏戦なんですけど圧倒的に一夏が負ける展開しか思いつかない。

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (前書き)

放っておいたら評価がかなりあがっていた。。。

なぜだ？

いや、うれしいんですけどね？

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!!

千冬side

大神蛮。世間では二人目のISの男性操縦者。これを聞いてまず思ったのが、驚きだった。一夏に対してはあの馬鹿が仕組んだことだが、そいつは純粹にISを起動したと言うことになる。そして、さらに驚いたのがその年齢だった。

30歳……。

そう、私よりも年上でおっさんである。

当人からしてみれば苦痛以外の何物でもないだろう。そして、政府から送られてきた資料にはほとんど個人情報に掲載されていないかった。出身地、学歴……。そのほとんどが黒く塗り潰されていた。あったのは名前と生年月日と好きな者と嫌いな者ぐら이었다。

その中身も目を疑うものだったが……。

しかし、私もそんなモノを認めるはずがなく政府に問い合わせて帰ってきた言葉が。

『霸道財閥が関わっている』

霸道財閥。世界の霸道と呼ばれ、そこら辺にあるものからないものまで生産している世界的企業である。

政治にも一枚絡んでおり覇道に逆らうこと自体愚かだと思い知らされる。

さらに言えばここIS学園の投資も行なっているらしく、IS学園側としては逆らえない。つまりアレであり、政府からも。

『粗相のない扱いをするように。さらに言えば織斑一夏より重要人物』

と返ってきた。

だから、私はそれなりの対応しようとしたのだが……。最初のあいさつで。

『……大神蛮・・d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた』

本人は正体を隠そうとしていたらしいがそれも早速失敗していた。さらに……。

『で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ぬばいと思っ』

本当に書いてあったことを言うとは思わなかった。そのあと、一夏が彼に話しかけたがなにやら上手くいかなかったと聞いた。

そして、あの馬鹿がイギリスの候補生と面倒を起こし模擬戦をすることになった。

そこで私はワザと彼を巻き込んだ。理由は、それほど政府が大事にする理由が知りたかったためと興味だ。

だが、彼は人としては最低の部類に入った。

確かに彼の方が年上だが彼は生徒だ。

彼は反抗し、言い合いになり私はつい童貞と言ってしまった。向こうも私を処女といい。ていうか、なんで私がしょ、処女だとわかったのだ!?

(彼のスキルです)

そして、彼は魔法使いとか言いだした途端私のブラのホックが外れた。私は冷静を保ったが彼にはお見通しだった。

これで、私は彼を人として最低の部類として見た。

だが、それは模擬戦で考えを改めて考えさせられた。

セシリア・オルコットはそれなりにはやる生徒だ。初心者相手にしてはだが。

だが、所詮その程度。

だから、一夏が勝てなくても仕方がない。アレは機体と本人が原因であるが。

そして、アリーナに現れた彼のISは異形だった。全身装甲であり、まさに鋼鉄の塊だ。

試合が始まり、戦いは始まった。

セシリアは相変わらずの戦いだっただけだ。対して彼はそれをすべて避けていた。

ただ、避けているのではない。ある一定の範囲内のみで避けているのだ。

そして、無駄のない動き。まるで、洗礼されたかのような動きだ。

彼はただ避けているだけだったのがとうとう動いた。と思ったらセシリアのISのビットを踏み台にして彼は蹴りを放った。

驚くはその威力だ。セシリアはそのままアリーナの壁に埋め込んでいた……。

「これが彼の實力……」

私は、とんでもない男を怒らせたのかもしれない。

End

試合終了後。

壁に埋め込んでいるセシリアは職員に回収された。そのまま第三試合が開始されるため蛸はそのままアリーナに残っていた。そして、器用なことに腕部と頭部の装甲を解除し煙草を吸っていた。

「ふうー。最近タバコ税が上がりそうのでロクに吸えやしない」

『何を言っておる。その金は全部あの小娘の財布から出ているくせに』

「ちなみに訂正で出ているじゃなくて俺が抜き取ってるの」

『駄目だ、こいつ。それより、我の前では吸うな。匂いがつくだろうが！』

「鉄に匂いなんかつくのかよ？」

まあ、匂いが付いたらリセッシュでもかけておいてやるよ。それから、車で使う洗剤で吹いといてやる。

『お主、今馬鹿なこと考えておらんか？』

「気のせいだ」

『ぬづ。お、来たぞ』

すると、向こうのピットから白い機体がやってきた。

ち、イケメンめ。俺のイケメンレーダがピンピンしてるぜ。きっとあの大佐殿もどきとすでにフラグを立てやがったな。

「なあ、アル。火炎放射器ってないか？」

『お主の思考がわかってしまう我が怖い』

『両者位置についてください』

放送が入る。

デモンベインはやはり地上で位置についている。

「ふうー。携帯灰皿を持ち歩いている俺カッコよくね？」

「タバコを吸ってない未成年に問われても困る」

「誰もデメエに言ってるねえよ」

そういつとどこかに灰皿をしまう蛮。ちなみに、今言ったのはアルに向かっただ。

アルとの会話は蛮のみだ。それか、アル自信が回線を開くしかない。

「ッ。あなたが俺の何を気に入らないかは知らないが真剣にやらしてもらっ」

「すべてだ、小僧。ちなみに、真剣なんて軽々使つな。これは、人生の先輩からの教えだ」

「・・・どうも」

『試合開始』

そして、試合が始まった。

「はっはっは。イケメンは消毒だあ~~~~!!」

火炎放射器はなにがそう言わないといけない気がする。

「はああああ!!」

対して一夏は接近戦しかできないためデモンベインとの距離を詰める。

雪片は発動しているだけでエネルギーを消費する欠陥武器だ。現在は通常の状態に収まっている。

「遅いなあ」

『あ、それ』

後ろに体を反り、そのまま回転しながら避ける。
それから、再びセシリアと同じように避けるだけの戦闘が続く。

「くっ、ちゃんと戦えよ！」

一夏はそれに痺れを切らした。

「しゃねえな。ほれ、バルカン」

デモンベインの頭部からバルカンが発射される。相手の機体のことを知らない一夏はこれがあるとは知らずもろに受ける。威力は低いが、零落白夜というエネルギー喰いがあるため効果は少なからずある。

「馬鹿にして!!」

「感情に流されるとは、未熟！（キリッ）」

『大人げない・・・』

大振りに雪片を振る一夏だが蛭はそれを簡単にも

「我流白刃取り！」

そのまま受け止めた。一夏はまさか受け止められるとは思ってもおらず一瞬の隙が生まれた。蛮はそれを見逃さず、彼の腹に蹴りを入れる。

「ぐはッ！」

勢いで雪片を手放し吹き飛ばす。

「う・・は、しまった！」

「そういえば、ISの武器は許可を出さないと他人は使えないらしいな。けどな・・！」

「！」

蛮は奪った雪片で一夏を斬りつけた。

「剣なんて振れば問題ねえの」

「ぐうう!!返せー!!!!」

「そして、剣なんてな」

そう言って雪片を膝で折る。

「折っちまえばただの鉄屑だ」

「テメエええええ!!」

雪片はかつて千冬が使っていたモノだという意識が強い。それが折られ、彼の逆鱗にでも触れたのだろう。だが、蛮にとってはどうでもいいことだ。

「本当、弱いな」

『まったくだ。これでは、先ほどの小娘とのがまだ殺り甲斐があったぞ』

「これこれ、字が違いますぞ」

『対して変わらん』

確かにそうだ。

まあ、イケメンの顔も見たくないのでケリをつけますか。

「アル」

『了解』

向かってくる一夏に対して蛮も走る。
そして。

「とうー!!」

「なに!?!」

接触するギリギリの所で上空へ跳ぶデモンベイン。

「我流!ライダーキック!」

動きを止めた一夏はそのまま攻撃を喰らい続ける。シールドエネルギーがどんどん減っていく。

「ウエーイー!!」

「ぐう!がはー!!!!」

シールドを突破し絶対防御が発動。
白式のエネルギーは0となった。

『勝者 大神蛮』

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。
大神蛮の全勝という形で。

「ちなみに、俺はライダーとしては剣フレイドが一番好き」

『また関係ないことを』

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (後書き)

実はこれって手抜きなんだぜ？

今後の展開として鈴がくるのですが彼は基本かかわらないので一気にトーナメント戦に移る可能性が高いんですよね。

いやだって、絡む要素がないんだもん。

絡むと言ったら原作三巻ぐらいか。。。

あ、ラウラは一夏のハーレムに入らないよ！
だって、俺ラウラが好きだもんね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816x/>

おっさんが逝くIS物語

2011年10月28日13時49分発行